



スピリット(霍元甲)

2006(平成18)年3月21日鑑賞(梅田ピカデリー)

監督=子仁泰ロニー・スー / 出演=李連杰ジェット・リー / 中村獅童シウ・リョウ / 孫儷ソン・リ / 董勇ドン・ヨン / 鄒兆龍コリン・チウ / 原田眞人 / ネイサン・ジョーンズ (ワーナー・ブラザース映画配給 / 2006年中国映画 / 104分)

……中国では有名な、清朝末期の実在の武術家、フオ・ユアンジャ霍元甲の生涯を、その人間性に焦点をあてて描いた異色作。1910年9月14日に上海で開かれた史上初の異種格闘技戦での闘いがハイライトだが、その当時、日本が西欧列強とともに中国でやったことは……？ 3月19日～20日に近代都市上海をこの目で見学し、21日に96年前の上海の姿をスクリーン上で観たのも、何かの縁……。しかしあまりの観客の少なさが心配……？



霍元甲という人物は？

パンフレットにある笠尾楊柳氏の「激動の時代を生きた霍元甲の素顔とは——」によると、フオ・ユアンジャ霍元甲ジェット・リー(李連杰)は、清朝末期、1911年の辛亥革命の直前まで、天津一の武術家として名をとどろかせた中国では有名な人物。そして映画上では農勁蓀ノン・ジンスン(董勇ドン・ヨン)の名前で登場する実在の人物、陳公哲とともに、精武体操学校(霍元甲の死後は精武体育会)を設立した。しかし、日本軍による上海爆撃で、精武体育会の資料の多くが消失してしまったため、霍元甲の生まれや死亡についての正確な資料は残されていないらしい。この映画では、霍元甲は試合の最中に毒殺されるという、いかにも卑怯な日本を含む西欧列強の犠牲にされている。孫文の強種強国(種族と国家を強めよ)の思想を掲げて精武体操学校を設立し、西欧の武術家を倒すことによって、漢民族の誇りを取り戻そうとした霍元甲が、西欧列強の悪だくみによって毒殺されたとしても、たしかに不思議ではないし、現実にもそういう説もあるらしい。

ちなみに陳公哲は、「霍先生は1909年陰暦8月、咯血病のため上海の中国紅十字会

医院で死んだ。若いときに気功をやりすぎ、肺を痛めていたのである」と書き残しているとのこと。さらに、霍元甲の享年は42歳と53歳などの各説があるとのことだ。

上海、1910年 vs. 2006年

私は2006年3月16日から3月20日まで杭州・烏鎮・無錫・鎮江・揚州・蘇州・周庄・上海旅行に行ったが、その最後の宿泊地が上海の逸和龍柏飯店。19日の夜、外灘（バンド）を見学し、南京東路の歩行街を歩いて、巨大都市上海の夜の雰囲気満喫した後、地下鉄に乗り、上海新天地まで足を延ばした。そこで私たちが外だけ見学し写真を撮ったのは、1921年に中国共産党の第1回党大会が開催されたという「一大会址」。滞在時間の関係で私が見学した上海は、有名な豫園の見学もないごくわずかなものだったが、私の印象ではその規模は既に大阪を大きく超え、東京以上の大都市に成長している感じ。そんな上海ももとはさびれた田舎村で、阿片戦争の敗北、1842年の南京条約の締結にともなって1845年にイギリスの租界地となったのが、以降の上海の発展の始まり。

この映画では、「東洋の摩天楼」と言われた上海の1910年当時の姿をスクリーン上で観ることができるが、私が自分の目で3月19日に見た2006年の上海と、3月21日にこの映画のスクリーン上で観た1910年の上海との違いは……？

「天津一」の価値は……？

強さのみを求めるのではなく、真の武術を探求している武術家（^{コリン・チョウ}鄒兆龍）の息子として生まれた霍元甲は、父親から少年時代、武術の道を禁じられたため、逆にその道に走り、鍛練を重ね、父の死後次第にその名を上げていった。霍元甲が目指すのは、天津一の武術家。そのためには「生死状」に署名し、生死を賭けて闘うことが不可欠だったが、霍元甲は連戦連勝で、既に霍元甲の前には「向かうところ敵なし」という状況となっていた。

私は天津にはまだ行ったことがないが、ガイド本で勉強したところでは、天津は北京から列車やバスで2～3時間の美しいまちで、北京市、上海市、重慶市などとともに中央政府の「直轄市」だが、中国各地にたくさんあるそれぞれに歴史と由緒を持った大都市ではない。別の言い方をすれば、中国にはこの程度の規模の都市はいくらでもあるということ。そのうえ中国には、少林寺をはじめとする武術の名門もあちこち

にたくさんある。したがって、霍元甲が目指した「天津一」では、巨大な中国大陸では、全国区にならないのでは……？

思わずダブらせたのは宮本武蔵

宮本武蔵が書いた『五輪書』は小さな文庫本にもなっているが、これは生涯を闘いに明け暮れた宮本武蔵が晩年悟りの境地に至った段階で書いたもの。がむしゃらに強くなろうと励んでいた青年時代の宮本武蔵はまるで飢えた狼のようなものだった。その問題点を沢庵和尚から指摘され、宮本武蔵が人間として成長していく姿を描いた大河小説が、吉川英治の『宮本武蔵』だが、霍元甲の青年時代は、まるでこの宮本武蔵の青年時代と同じようなもの。そのため無用な恨みを買うことも多く、その最大の事件がチン先生との対決だった。霍元甲の弟子が武術家のチンによって大ケガさせられたことがきっかけとなって発生した霍元甲とチンとの決闘において霍元甲は勝利をおさめたが、父親を殺されたチンの息子は、霍元甲の母親や愛する娘に対して報復を……。憎しみは憎しみを生み、復讐は復讐を生むことを思い知らされ、はじめて真の強さとは？ 真の武術とは？ を考えざるをえなくなった霍元甲だったが……。

ハイライトは史上初の異種格闘技戦

中国へ進出した西欧列強にとっては、中国はどう見ても二流国であり、中国人も二流国民。したがって、武術の世界においても、2mを超すアメリカの巨漢レスラーであるヘラクレス・オブライアン（ネイサン・ジョーンズ）が、「東洋の腰抜けども」を次々と破り、王者に君臨していれば問題ないが、それがいとも簡単に小柄な中国人武術家の霍元甲にやられてしまったのでは面子にかかわることに……。

そこで考えたのが、4人の外国勢と霍元甲を次々に対決させるという世界初の異種格闘技戦。この企画にはアメリカのプロモーターのみならず、日本人のミスター三田（原田真人）も参画したが、これは去る3月21日「王ジャパン」が苦労の末に優勝を勝ち取ったWBCの試合の裏で、いろいろとアメリカに一方的に有利なルールを押しつけられていたのと同じように、インチキ性の強いもの……。この異種格闘技戦のハンディキャップは、とてつもなく大きいものだった。今や精武体操学校を設立して霍元甲と一心同体の農勁蓀は、この試合はワナではないかと疑うが、霍元甲はそれをわかったうえでこれを受諾。ここに1910年9月14日、上海の会場において史上初の異

種格闘技戦が開催されることになった。そして霍元甲は次々と登場する西欧人武術家を倒していったが、最後に登場したのは日本人の武術家田中安野（中村獅童）。さて、この2人の頂上対決は……？

善玉の日本人と悪玉の日本人

まず悪玉の日本人は、上海の外国人商会の会員であるミスター三田。『ラスト・サムライ』（03年）で53歳にして俳優デビューしたことによって、原田真人氏は監督業の他、俳優業にも意欲を示しているが、私の目には彼の役者としての才能はもうひとつと思えるが……。

他方、善玉の日本人は武術家の田中安野。決戦の前に霍元甲と武術論を論じ合った(?) 田中は、霍元甲の武術に対する考え方に大いに感服することに……。そんな2人はまずは田中の剣と霍元甲のヌンチャクのお化けのような武器によって対決したがそれは引き分けとなった。しかして、素手による第2ラウンドの対決は……？

中村獅童の出番は、中国語による霍元甲との話し合いの静のシーンと、決戦の舞台でのアクションシーンの2つだけだが、その役柄をキッチリとこなしているのはさすが……。

興味深い清朝末期の住宅

中国旅行の回数が増えるにつれて、歴史や文化などの勉強とは別に少しずつわかってくるのは、中国の住宅事情。日本は昔から木と障子の住宅で、履物を脱いで部屋に上がるというライフスタイルだったが、中国はそうではなく、どちらかというと西欧流。すなわち石造りとはいえないまでも、床は石張りで壁は土を固めたものだし、家の中でも履物を履いているライフスタイル。また住宅のつくりも門をくぐると前庭があり、最初に入る部屋は客間で、そこにはイスとテーブルが並んでいるというヨーロッパ式。

これが私が『活きる』（94年）、『春の惑い』（02年）、『朱家の悲劇』（94年）などの映画や中国旅行の体験で学んだ私なりの中国の住宅事情。もっとも、これは上流階級だけの世界であることは当然……。

そんな私が学んだ中国の住宅事情が、この映画でも霍元甲の父や家族たちが住む住宅にはっきりと表れているから面白い……。もっとも、この霍元甲の父が死亡し、霍

元甲が放浪の旅を続けている間、このお屋敷を可能な限り元の状態に保っておくことはかなり大変な仕事だが、霍元甲の父親の代からの使用人は、霍元甲が帰ってくるまで立派にその任務を果たしていた。その給料がどこから出ていたのか少し気になるが、それはともかく、何年か振りで家に帰ってきた霍元甲がまずやったことは、かつての誇りの象徴であった「生死状」を焼却してしまうこと。さて、そのココロは……？

新人女優にも注目！

愛する母や娘を復讐によって失った霍元甲が失意のうちに天津を離れ、何千キロもさすらい歩いた中で救われたのは、スンおばあさんとその孫娘の月慈（ユエツウ スン・リー 孫儂）。何でも心の目で見ることができるといふ盲目の少女月慈の生き方に触れ、さらに奥深い山里の自然の中で純朴に生きている村人たちの姿を見るにつれて、霍元甲の心の病も次第に回復していくことに……。月慈が着ている服や帽子を見ていると、中国に55存在している少数民族の1つではないかと思われるが、映画の中ではそれは不明。

それはともかく、この月慈を演ずる孫儂は1982年上海生まれの女優で、TVでの活躍を経て本作でスクリーンデビューを果たしたとのこと。この映画では、霍元甲の世話をしていく中で次第に霍元甲との距離が近づいていくという微妙な村娘の気持の動きをうまく演じているが、これだけではまだまだその真価はわからない。今後どんな活躍をすることになるのか、その名前をキッチリと覚えておかなければ……。

2006(平成18)年3月22日記